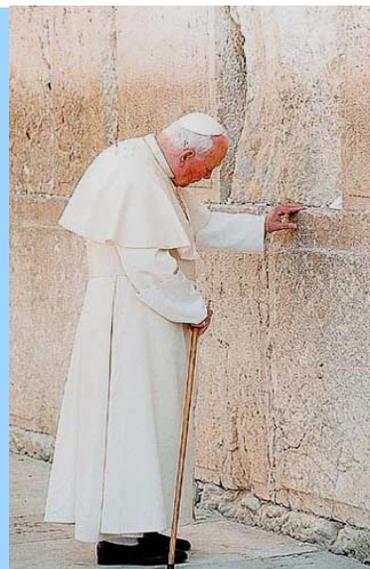


法王ヨハネ・パウロ二世の死を悼むイスラエル

法王ヨハネ・パウロ二世の死は、世界に大きな悲しみをもたらすものとなった。イスラエルでも、その死を悼む声が強く上がっている。シャロン首相は『法王は、平和の人であり、ユダヤ人の友であった。そして、世界は私たちの世代で最も重要な指導者を失った』と哀悼の意を述べている。シモン・ペレスも法王を回顧して『まことに真の霊的指導者であった』と語った。

それは、法王のイスラエルに対する特別な感情と、行動によるものである。法王は、1996年にローマにあるシナゴグを訪れ、そこで『ユダヤ人は、愛すべき兄である』と語り、『旧約においてユダヤ人に与えられた約束は今も破棄されてはいない』と公言した。また、2000年にはイスラエルを訪問し、最終日に訪れた西壁において、祈りの中で過去にカトリック教会がユダヤ人に対して犯してきた罪の赦しを求めた。また、壁の石の隙間に入れる紙に次のような言葉が綴られていた。「父なる神よ。あなたは御名を国々に現すためにアブラハムとその子孫を選ばれました。私たちが、歴史を通してあなたの子たちの苦しみの原因となったことを深く悲しみます」

先のラビ長であったイスラエル・メイア・ラウが法王と会見した時のことである。ラビ・ラウは法王に尋ねた「あなたはどうしてユダヤ人に対して、特別な関心を持っているのですか。ユダヤ人の改宗を望んでいるからでしょうか?」。それに対して、法王は問い返した「あなたは、私がどこで生まれ育ったか知っていますか?」ラビは答えて「もちろん、ポーランドのバドビチュエですね」と言った。そして、法王は、「子供の時から私の多くの友はユダヤ人だった。私が子供の時には、大きなユダヤ人のコミュニティーがあった。しかし、戦争が終わってみれば、みんななくなってしまった。その時には、私には何の力もなかった。しかし、今私には何かができるのです」また、法王（本名：カロル・ヨセフ・ウオイティラ）の子供の頃の友で、ホロコーストの生き残りであるジュレク・クルーガーが当時を回顧して語っていた。ある時、クルーガー少年がミサ中の教会にカロル少年に会うためにやってきた。ミサが終わった時、一人の女性が、ユダヤ人であるクルーガー少年のところにやってきて、『あなたは、クルーガーでしょう?クルーガー医師の息子でしょう?一体ここで何をしているの!』そうやって彼女は不愉快な顔をして、行ったり来たりしていた。その行動にカロル少年は腹をたて次のように言った「私たちは、同じ神の子ではないか。でも、彼らは決して、それを理解することはできない」。その時、わずか10歳であった。



西壁に立つ法王ヨハネ・パウロ二世

シャロン政権生き延びる

2005年の予算案が3月の末までに国会で承認されない場合、解散総選挙という、ぎりぎりのところに立たされていたシャロン内閣であるが、超世俗派のシヌイ党の抱きこみに成功し、この大きな危機を乗り切った。シャロン首相は、賛成票の欠けを満たすために「ユダヤ教トーラー統一党」の支持の取り付けに動いた。シヌイ党の猛反対を押し切って、同宗教党の予算請求に応じた。いわば、それはシヌイ党に対する裏切り行為であった。しかし、撤退案を支持するシヌイ党は最終的には、解散を避けるために予算案の支持に回るだろうとのシャロン首相の読みがあった。そして、際どいところでその読みの通りにシヌイ党がなびいて来ることになった。

これで、世界の目がこの夏の撤退案の履行に向けられることになった。

三宅弘之

L C J E 海外協力レポーター

夏のお騒がせ

今年のイスラエルの夏は、ホットになりそうだ。撤退案の履行もそうであるが、8月にエルサレムで予定されている「同性愛者パレード」もホットな夏の原因である。すでに、その開催に反対する声が高まっている。世界3大宗教であるユダヤ教、キリスト教、イスラム教にとって、エルサレムは聖地である。それゆえ、ユダヤ教とキリスト教に敵対するイスラム教ではあるが、この問題に関しては、協力し、声をそろえて反対を叫んでいる。

指導的なラビたちとキリスト教福音派のレオ・ギョヴィネッティ牧師のイニシアティブにより、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の代表者たちが集って、「同性愛者パレード」に反対を表明するための共同記者会見が開かれた。